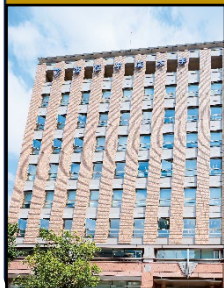


発達障害当事者の大学適応に関する研究



【池袋キャンパス】臨床心理学研究科 講師

江口 聡 Eguchi Satoshi

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード : 大学・発達障害・支援手引き



研究の概要

SDGs 目標 3 : すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 16 : 平和と公正をすべての人に

現在、自閉症スペクトラム障害（ASD）や、注意欠如多動性障害（ADHD）などの発達障害が、大人になって初めて診断される方が増えてきた一方、特性によって孤立感や疎外感、自信喪失を感じやすく、気分障害や不安障害などの二次障害の合併が多いことも報告されている（Joshi et al, 2010; Michielsen et al, 2012）。特に大学や就労など、高校以前と異なり自由度が高い場面で不適応になる当事者が多い。就労という、本人の責任がより強くなる前の時期である大学での生活において、本人が自分のことを知ることや、周りの人に理解を求められるような資料、また周りの人たちも当事者との関わり方がわかる資料があることは、大学以降の適応を考える上でも重要と考える。

以上のことから、本研究では大学という場で用いることができる、ASD 当事者の方々の特徴を周知するための資料作成を研究の目的とする。具体的には、今回は大学での適応をテーマに、発達障害当事者への心理検査データをもとに、ASD の認知特徴と工夫を小冊子として作成し、その有効性を検討する。ASD 特有の認知機能について科学的に情報を収集し、その内容から生じることについて、当事者や支援する人が知ること、本人の自己理解が進み、また周りの人々は発達障害についての正しい知識や特性を知ることができる。

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

就労をおこなう場面において、ASD 当事者が自分のことを理解し、周りにも周知できるようになることについては、仕事と並行しながらという点において難しいことが多く、筆者の経験からもうまくいかないことが生じたことがある。そのため、就労する前の段階である大学在学時代に、本人が自分のことを知ることや、周りの人に協力を求めるために用いることが出来る資料を知っておくことは重要であると考え。また、ASD 当事者の人は、本人たちの特性などの影響から自尊心が低いことなどがあり、自分から周りに協力を求めることが難しく、問題が大きくなって初めて相談ができるということもある。そのため、周りに協力や助けを求められるような経験を肯定的に持つことも重要である。このように、予防的な観点をもち大学時代にアプローチをおこなうことで、就労後に他の精神疾患を併発することのリスクなども低減できる可能性があり、それが企業の経済的な損失の予防にもつながると考える。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

- ・「東京大学医学部附属病院における発達障害検査入院の試み(1)」
- ・「成人自閉スペクトラム症の特徴と心理教育」
- ・「東大病院における発達障害検査入院の試み」